

第72回「ながの銀嶺国体」天皇杯・皇后杯同時獲得に思う

競技本部長 田 口 將

私事、長野オリンピック以来約20年ぶりの白馬村でしたが、会場もコースもほぼ当時のままで懐かしさを感じたと同時に、なぜか他開催地とは違い敵地に乗り込んできたという感覚と緊張感がありました。

今大会では、昨年の優勝者である馬淵源・中村和司の両選手が怪我のため欠場するという事態を受け、たいへんな危機感をもって臨まざるを得ない状況でしたが、しかし、チームとしてはそれが大きな結束力となりプラスに作用したともいえるかもしれません。

振り返ると、平成9年の鹿角国体を機に花輪スキー場の大整備が行われ、アルパスを中心とした現在の様相に一変しました。更には平成19年の「秋田わか杉国体」に向けジャンプ台等の大改修が行われ、競技会場として、素晴らしい環境が整い、同時に総力を上げて取り組んだ強化策が実り、その年、初の天皇杯を獲得しました。

今大会では、この環境整備と併行して継続的かつ組織的な強化の基盤を脈々と受け継いでこれた強さがあったからの結果だったように思います。また、わか杉国体後「2011・2013」と立て続けに冬季国体スキー競技会を地元で開催したことにより、秋田県チームには地元の期待に応えるべく強い団結力が生まれ、選手たちの国体に対する思いを変えてこられたことも今国体での快挙に繋がった大きな要因になりました。

選手個々の活躍は枚挙に暇がありませんが、特に昨年の負けをバネに圧倒的な強さで優勝したGSの生田康宏、自らのリレー逆転劇で皇后杯をつかみ取った石垣寿美子、コンバインドで貫緑の連覇をし、男子リレーでも62年ぶりの逆転優勝の立役者となった湊祐介、これらチームを牽引してくれた社会人選手には、心から敬意を表したいと思いますし、感謝の念に堪えません。

劣勢を覚悟し危機感を持って臨んだ「ながの銀嶺国体」で、秋田県初の天皇杯（10年ぶり2度目）、皇后杯（3年ぶり7度目）同時獲得という結果で歴史に名を刻むことになった全出場選手、ここに至るまでの強化はもちろん、現地では朝から暗くなるまで走り回って最高のコンディションを作ってくれた優秀な監督・コーチ、夜遅くまでサポートしてくれたトレーナー、常に安心感を与えてくれる帯同ドクター、そして様々な形で応援を頂いた秋田県 小笠原直樹団長（秋田県体育協会会長）をはじめとする役員の方々、この日本一の「チーム秋田」を誇りに思います。

これからも、秋田県のスポーツ界を牽引する「秋田県スキー連盟」であり続けたいと思います。

この度の偉業達成にあたり、関係する全ての皆様に感謝を申し上げますと共に、今後とも変わらぬご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

